法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-12

<資料紹介>英国におけるオーラルヒストリー(3) : Britain at Work : Voices from the Workplace 1945-1995 の活動

UMEZAKI, Osamu / 梅崎, 修

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン : 法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies
(巻 / Volume)
13
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
135
(終了ページ / End Page)
143
(発行年 / Year)
2015-09

Hosei University Repository

〈資料紹介〉

英国におけるオーラルヒストリー（3）
―Britain at Work: Voices from the Workplace 1945-1995 の活動

法政大学キャリアデザイン学部教授　梅崎　修

1．はじめに

本稿は、英国における労働史におけるオーラルヒストリー・アーカイブについて紹介する。既に梅崎（2014）では、英国におけるフリーランスのオーラルヒストリアンたちの活動を紹介し、梅崎（2015）では、英国におけるオーラルヒストリーのアーカイブ化について、ロンドン博物館（Museum of London）や大英図書館（British Library）の活動を紹介した。これらの報告は、2013年4月より2014年3月まで大学の在外研究制度を利用して英国ロンドンに滞在した際に大学や博物館などを訪問し、研究者、アーキビスト、およびフリーランスのオーラルヒストリアンへのインタビューを行った成果である。

ただし、英国は米国と並んでオーラルヒストリーの先進地域であるので、数回の調査報告だけで英国における多様なオーラルヒストリーの研究や活動を紹介することはできない。研究の紹介に関しては、トンプソンの主著『記憶から歴史へ－オーラルヒストリーの世界』（Thompson, 2000）が翻訳され、酒井（2008）のような日本語テキストも刊行されて日本の研究者にもその全体像が明らかになってきた。しかし、大学や博物館などのオーラルヒストリーの収集・整理・展示については十分に紹介されているとは言い難い。海外のオーラルヒストリーの紹介に関しては、私が研究仲間の田口和雄氏と行った、米国におけるオーラルヒストリー・センターの紹介がある（梅崎・田口（2012, 2013, 2014）、田口・梅崎（2012, 2013a, 2013b, 2014））。しかし、英国に関しては情報が少ないと言えよう。本報告は、日本においてオーラルヒストリーに取り組む人々、特に労働史研究に関心を持つ人々にとって高い情報価値があると考える。

梅崎（2014, 2015）でも指摘したように、ここ10年の間、日本においても様々な学問分野でオーラルヒストリーという研究手法が広がってきた。ところが、日本のオーラルヒストリー・プロジェクトは、未だに個人レベルやチーム・レベルの取り組みに止まっているとも言える。特にオーラルヒストリーのアーカイブ化に関しては、その重要性が指摘されつつも実行するのは難しいと言えよう。将来、日本においてオーラルヒストリーの収集・整理・展示が進展しなければ、オーラルヒストリーという調査が世代を超えて引き継がれない。言い換えれば、オーラルヒストリーのアーカイブがあれば、調査と研究は地域や世代を超えてその利用者に広がっていくと思う。

私は、2015年3月18日にLondon Metropolitan Universityの図書館に設置されているTUC Libraryを訪問した。この図書館は、英国労働組合史の歴史資料を多数保存し、オーラルヒストリー・コレクションに関しては、Britain at Work: Voices from the Workplace 1945-1995というホームページを設けている。本稿は、この資料とホームページの管理担当者であるJeff Howarth氏（Academic Liaison Librarian）へ

Hosei University Repository

のインタビューを行った報告である。労働史オーラルヒストリーは、日本でも調査蓄積があり、方法論に関しても学会で議論されている（詳しくは梅崎（2007, 2009）参照）。しかし、労働史オーラルヒストリー・アーカイブは進んでいない。それゆえ、Britain at Work プロジェクトは、我々労働史研究者にとって目標になると言えよう。

2．TUC Library コレクション

The TUC Library Collections は、1922年に成立した英国労働組合の資料群である。労働組合運動に関してあらゆる側面の資料が保存されている。19世紀後半から現代までの労働組合の公的文書、パンフレット、定期刊行物、およびオーラルヒストリーなどが含まれる。労働史研究者にも、また生涯学習の一環で労働組合の活動を調べたい人のために労働組合の歴史資料が保存・整理・公開されている。

TUC（Trades Union Congress）とは、英国における職種別労働組合の会議体であり、1868年に設立されたという古い歴史を持つ。現在、52の連携組合と約600万人の組合員が TUC に所属している。この団体は、政府に対するロビー活動、組織的な宣伝活動、労働教育、および調査活動などを行っている。この TUC が保管していた資料が1996年に London Metropolitan University に移管されたのである。

図1～3に示したのは、The TUC Library Collections の保存・整理状況である。広い場所に移動書庫が設置されている（図1参照）。書籍以外の一次資料は、それぞれボックスに入れて整理されている（図2,3参照）。この他にアーキビストの部屋と共同作業ができるデスクがある。London Metropolitan University は場所を提供し、TUC は Jeff さんの賃金などを含む運営費を援助している。ちなみに Jeff さんは、Forward to freedom という社会運動資料のプロジェクトに参加していたが、その後このプロジェクトに転職してきた。社会運動・アーキビストたちのネットワークがあるようだ。さらに、他にも多くのボランティアがこのプロジェクトに参加している。なお、このプロジェクトは、1995年には Heritage Lottery Fund の助成を受けている。

Britain at Work では、調査活動に関しては、協力パートナーを交えた会議が2～3ヵ月に1回

図1 TUC Library Collections 内部写真①

（資料出所）筆者撮影

Hosei University Repository

図２　保存資料写真①
（資料出所）筆者撮影

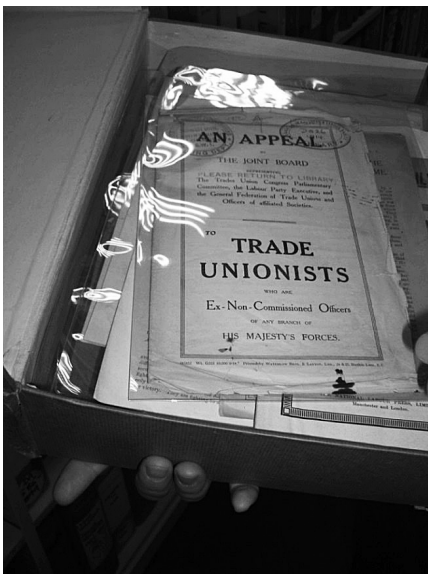

図３　保存資料写真②
（資料出所）筆者撮影

開催されている。具体的には、継続するプロジェクトや新規プロジェクトの企画・運営が話し合われている。

また、ここの資料を使った労働教育や研究会も盛んに行われている。2015年3月21日に開催されたIndependent Working Class Education Seminarでは、Britain at Workにも参加し、セミナーの世話人でもあるDavid Welshさんの紹介で、私も急きょ参加することになり、日本における労働史オーラルヒストリーについて報告した。Independent Working Class Education Seminarとは、アーキビストや労働教育のボランティア、元労働組合リーダーたちが意見交換できる場である。参加者は少なかったが、和気あいあいで真剣な議論が行われていた。

むろん、英国においても労働組合の組織率は低下し、産業別労働組合の活動規模も縮小している。しかし、このセミナーにおける活発な議論を聴きながら英国労働運動の草の根の伝統を感じることができた。なお、セミナーの案内は次の通りである。

Meirian Jump, *Archivist & Library Development Officer, 'Archives& Education at the Marx Memorial Library'*
Arthur McIvor *(Stratthclyde Uni.) on Working Lives, Work in Britain since 1945*
Rosa Vilbr*, An oral history on Centreprise bookshop/ cafe in Hackney*
Doug Wright *The history of busworkers in London and the present dispute and "We are fortunate to have* ***Osamu Umezaki*** *from the Osaka Labour Archive in Japan joining us on Saturday. His interests include Oral history."*

報告者の一人であるArthur McIvor教授は、英国労働史の研究者であり、オーラルヒストリアンである。彼は、2013年にThe TUC Library Collectionsを使って*Working Lives: Work in Britain Since 1945, Palgrave Macmillan*を書き上げている。また教授は、2000年に*A History of Work in Britain, 1880-1950 (Social History in Perspective),* Palgrave Macmillanを刊行している。ところで、University of Strathclydeには、1995年に

Hosei University Repository

設置されたThe Scottish Oral History Centreがあり、彼は主要なメンバーである。また同センターのホームページによると、グラスゴーにあるThe Scottish Oral History Centreはスコットランドにおけるオーラルヒストリー研究のまとめ役になっていることがわかる。いずれこのセンターを訪問し、日本のオーラルヒストリアンたちにもその活動を紹介したいと思う。

3．The Britain at Workについて

（1）アーカイブの構成

Britain at Workは、オーラルヒストリーの調査・資料管理・発信を行うプロジェクトであり、図4のようなWebサイトを公開している。

このプロジェクトは、Workers' War projectから発展したものであり、主にオーラルヒストリーを使って1945年から1995年までの労働者の記憶の保存を行っている。語り手たちは、急激な社会変化の中で第二次世界大戦後の経済再建を支えた人たちであり、戦後50年の労働者たちの経験は極めて多様と言えよう。このような調査目的は、日本の戦後労働史研究に取り組むオーラルヒストリアンたちとも共有できるものであろう。さらに最近は、既存調査グループの中からサブグループが生まれている。Jeffさんによれば、黒人、カリビアン、インド、パキスタン、ウガンダなどの移民労働者の調査も開始されている。このプロジェクトは、労働組合運動に限定されず、労働史全般を調べている。

Britain at Workの特徴は、労働史研究のために利用されているだけでなく、労働教育のための

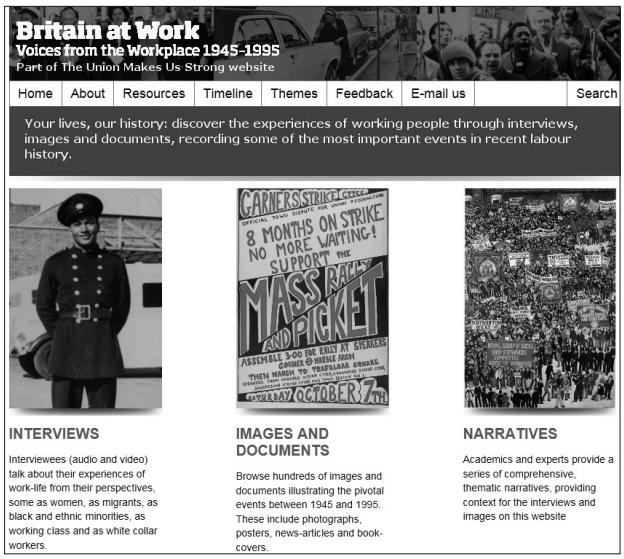

図4　The Britain at Workのウェブサイト

（資料出所）Britain at WorkのWebサイト

利用が多い点である。Jeffさんは、この労働教育には多様な方法があるが、正解を探すことはとても難しいと言う。我々は、現在の問題を追いかけすぎて物事の本質を見失うことが多く、歴史に学ぶことは多い。しかし実際のところ、「歴史を学ぶことの意義」を説得的に語ることは難しいと思われる。Jeffさんたちも、その難しさを語っていたが、その困難に凹まず、継続的に新しい課題に取り組んでいた。

私は、オーラルヒストリーの社会的意義につい

Hosei University Repository

て詳しく質問した。Jeffさんは、オーラルヒストリーは「民主的なプロジェクト」であると言う。つまり、オーラルヒストリーを使ってコミュニティを再発見するのである。彼は、オーラルヒストリーという社会活動はコミュニティの再構築にもつながると考えている。加えて彼は、実践的な課題を持ったオーラルヒストリーは助成対象として好まれるとも言っていた。一方、極めて私的な理由から資料を利用する人も多いことも指摘していた。自分の家族史を調べるために資料を調べるに来る人たちである。英国におけるオーラルヒストリーの裾野は広いのである。

ところで、Jeffさんによれば、労働組合内部において、最近歴史保存の優先順位が下がってきた。リーマンショックの影響として予算削減もあった。日本の現状から見れば、大規模な労働史のアーカイブは羨ましいかぎりであるが、英国の研究者やアーキビストも苦労しながらアーカイブの運営をしていることがわかった。

なお、このプロジェクトの最初のアイデアは、Nina Fishman（1946-2009）によって生まれた。彼女は、オーラルヒストリーに関心を持つ歴史家、地域活動家、ライブラリアンなどをネットワーク化してネット上のオーラルヒストリー・コレクションを作った。これらの先行する取り組みが徐々に拡大し、2009年に開始されたBritain at Workプロジェクトに繋がった。さらに2012年には、図4に示したWebサイトが完成したのである。なお、このWebサイト公開には、Heritage Lottery Fundだけでなく、Barry Amiel,Norman Melburn Trustの助成も受けている。

（2）資料群の説明

続いて、Britain at Workが管理する資料を紹介しよう。まず、44のインタビューの映像資料がある。この映像資料は、TUC Millennium Film Projectによって作成されたものであり、主に労働組合リーダーや政治家たちの口述記録である。これら映像は労働組合史の貴重な資料と言えよう。

加えて、このオーラルヒストリー・プロジェクトには、これまでLondon partners HISTORY talkやBishopsgate InstituteやLondon Metropolitan University Centre for Trade Union Studiesが作成した音声とトランスクリプションも含まれている。すべて合計すると、100人以上のインタビュー記録がある。ここでは、それらの資料を保存し、利用し易い形で整理しているのである。現在、調査中のオーラルヒストリーもあるので、将来もっと資料は増え続けるであろう。

また、音声資料として、技術者、公的交通機関、健康保険、エンタテイメント、ジャーナリズム、工場、オフィスなどの様々な職業や職場の経験談がある。全ての音声資料を文字起こししているわけではないが、完全なトランスクリプションも多数保存されている。さらに、400以上のImages and Documentsのオンライン・アーカイブには、写真、ポスター、イラストなどが整理されている。

なお、オンラインの資料は、以下の7つの分野に分かれており、Webアーカイブでは、それぞれの分野ごとに整理され、説明文も追加されている。

Health and safety
Workers' education
Women at work
Employment law
Trade union organisation
Race and trade unions
White collar unionism

Hosei University Repository

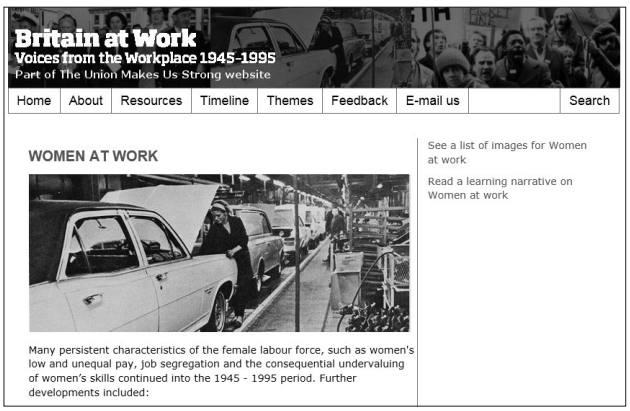

図５　分野別のページ

（資料出所）Britain at Work の Web サイト

また、分野別ではなく、以下のような時期区分によっても整理されており、時代別区分別の説明文を読みながら興味がある資料を探すことができる。

1945-1951
1951-1960
1960-1970
1970-1974
1974-1979
1980-1995

さらに、Audio and Transcripts に関しては、オーラルヒストリー対象者の名前や職業、共同調査機関、資料の保管場所などからオーラルヒストリー資料の検索を行うこともできる。目的のオーラルヒストリーを探して紹介文を読み、トランスクリプションを読み、MP3で保存されている音声データを聴くことができる。一方、映像資料は、図６のように YouTube にアップされ、Britain at Work の Web サイトとリンクされている。また、Images and Documents はカラー画像をネット上で見ることが可能である。

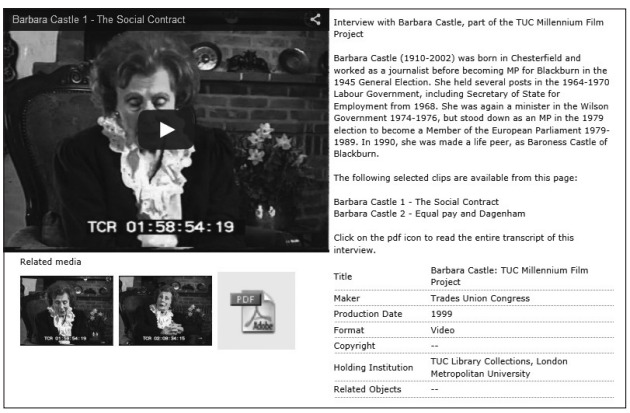

図６　映像資料の公開

（資料出所）Britain at Work の Web サイト

Hosei University Repository

4．アーカイブを支える視線

本報告は、Britain at Work についてその活動を紹介したものである。私と研究仲間たちは、梅崎（2015）でも報告したように日本における労働史アーカイブの Web サイトの構築を行っている。この意味で Britain at Work は、我々のモデルとなる取り組みであった。それゆえ、この報告は、我々以外にも同様の取り組みを行っている研究者やアーキビストに役立つと考える。

もちろん、Britain at Work の資料管理や公開の方法は、直接的に役立つ情報と言えるが、今回の訪問から学んだことはノウハウを越えた部分もある。Jeff さんは、アーカイブの予算も縮小し、労働組合運動自体も縮小していると言う。労働組合の組織率が縮小していることは日本でも同じであるが、英国では Britain at Work という成果が生み出された。スタッフやボランティアの皆さんとお話し、Independent Working Class Education Seminar に参加した中で、英国労働組合関係者には「歴史から学ぶべき、歴史を保存すべき」という共通する社会認識が存在すると感じた。むろん、アーカイブ構築にはお金や技術の問題はあるが、資料群を支える今を生きる人々、特に研究者以外の人々の「視線」も重要なのではないかと思えた。

日本において労働史アーカイブを作るならば、大きさに拘らなくてもよいのだろう。技術も少しずつ学べばよいのだろう。何よりも先にアーカイブを支える「視線」を、アーカイブの活動自体が生み出していくような活動が求められているのではないか。実際、私が感じた英国の社会意識を上手く説明することは難しい。実証的に明らかにしたわけでもない。しかし、これが自分の体験の中で感じた労働組合運動の伝統である。

最後に、参加したセミナーの終了後、パブでの飲み会に参加した経験について蛇足ながら追記しよう。セミナー参加者たち日本からの突然の訪問者にエールビールを奢ってくれた。「お客さん」として遇してくれたのである。実際のところ、自分の英語力を棚に上げて言うのだが、英国の大学で聞く英語よりも彼ら彼女らの英語はとても聞きにくかった。必然的に私は聞くだけの立場になる。そこで酒場での議論を聴きながら、タイミングを計って二杯目は俺に奢らせてくれと言ってみた。「やるじゃないか」という笑顔があった。お客さんから「仲間」に近づけたのかもしれない。この Working Class に流れる仲間意識が歴史資料を支える「視線」の正体なのではないかと思ったのである。

参考文献

梅崎修（2007）「労働研究とオーラルヒストリー」『大原社会問題研究所雑誌』589, pp. 17 ～ 32

――――（2012）「オーラルヒストリーによって何を分析するのか－労働史における＜オーラリティー＞の可能性」『社会政策』11, pp. 32 - 44

梅崎修・田口和雄（2012）「Regional Oral History Office（ROHO）のオーラルヒストリー・アーカイブについて」『生涯学習とキャリアデザイン』9, pp. 75 - 85

――――・――――（2013）「コロンビア大学・CCOH（Columbia Center of Oral History）におけるオーラルヒストリー調査とアーカイブについて」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』10, pp. 319 - 338

――――・――――（2014）「MATRIX（The Center for Digital Humanities and Social Sciences at Michigan State University）におけるオーラルヒストリー・デジタル・アーカイブの試み」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』11, pp. 279 – 296

――――（2014）「英国におけるオーラルヒストリー（１）－フリーランスのオーラルヒストリアンたちとの出会い」『生涯学習とキャリアデザイン』第 12 号（1）pp. 123 - 130

――――（2015）「資料紹介　英国におけるオーラルヒストリー（2）－ 収集・整理・公開の方法」『生涯学習とキャリアデザイン』第 12 号 (2),

Hosei University Repository

pp.121 -130
———（2015）「労働史オーラルヒストリー・アーカイブの試み－映像化の取り組みと資料の利用可能性を中心に－」『社会政策』掲載予定
酒井順子（2008）『市民のオーラル・ヒストリー―歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版部
田口和雄・梅崎修（2012）「アメリカにおけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の現状について－ UCLA Center for Oral History Rsearch（COHR）のインタビュー調査をもとに」『高千穂論叢』47(1) pp. 99 - 119
———・———（2013a）「NYU Tamiment Library & Robert F. Wagner Labor Archives におけるオーラルヒストリーのデジタル・アーカイブ化について」『高千穂論叢』47(4)pp. 97 - 118
———・———（2013b）「The New York Public Library for the Performing Arts and the Ellis Island Immigration Museumにおけるオーラルヒストリー・プロジェクトについて」『高千穂学園創立 110 周年記念論文集Ⅰ』pp.311 - 323
———・———（2014）「WSU Walter P. Reuther Library and Urban Affairsにおけるオーラルヒストリー・プロジェクトとアーカイブの現状について」『高千穂論叢、高千穂学園創立 110 周年記念論文集Ⅱ』48(3・4), pp. 139 - 162
Paul Thompson（2000）The Voice of the Past: Oral History 3 rd. ed. Oxford（酒井順子訳（2002）『記憶から歴史へ－オーラル・ヒストリーの世界』青木書店）。

Hosei University Repository

Oral history in the United Kingdom (3)
—Britain at Work: Voices from the Workplace 1945-1995

UMEZAKI Osamu

This report introduces an oral history archive in the United Kingdom (UK), a country that is advanced in the study of oral history and in related research. I visited the Britain at Work in the UK that had oral history records pertaining to the British history of labour. The staffs had knowledge on how to manage and exhibit oral documents. I interviewed some staff members of the archive and attended some exhibitions on oral history. This paper presents my report on my investigations. It is likely that this report will offer valuable information on ways of collecting, safekeeping, and exhibiting oral history, which will be useful for Japanese oral historians.